

# 北の大地に根づいた荒木派の芸風

中島 聖山

琴古流荒木派に関しては、既に本誌第二十三号で、昭和に入ってから札幌を中心に活躍した高橋渉童を通じて述べたが、それは四世荒木古童とのつながりに過ぎなかった。高橋渉童より十年以上も前から、三世荒木古童に師事し、本道で活躍していた人物がいた。その一人は函館で楽器商を営んでいた長谷川羊童であり、もう一人は逸童派から転門した釧路の室井琢童である。

今回はこの二人の内、最も早くから荒木派を極め活躍していた長谷川羊童に焦点を当て、北海道における荒木派の創成期に触れてみることにする。



故荒木古童師（雑誌「三曲」昭和10年6月号より転載）

## 三世古童を招聘して演奏会

長谷川羊童は明治二十八年十一月五日函館に生まれ、本名を権九郎といった。明治四十三年十五歳のときに三世荒木古童に師事して、琴古流尺八を学び始めた。荒木古童への入門の動機や、手ほどきを受けた場所などは定かではない。

ある程度吹けるようになった長谷川羊童は、荒木古童が主宰する童窓会の下部組織として、童窓会函館支部を設立した。これは当時本道に存在しなかった荒木派の拠点作りであり、支部開設は童窓会組織の北方拡大に大きな意味を持った。更に長谷川羊童は支部とは別に、社中の組織として「竹友会」を設立した。中央に対しては支部、そして地元とのつながりでは社中というように、長谷川羊童は二つの組織を上手に活用して荒木派の普及発展に努めた。今では当たり前だが、当時としては先駆的な考えだったに違いない。

門人の数が次第に増え、社中の基盤も整った大正十一年、長谷川羊童は恩師三世荒木古童を招聘して、念願の演奏会を開催した。八月十二日のことであり、会場は函館でも近代建築の代表として知られていた公会堂だった。この時荒木古童は、糸方として山室千代子を同行し「八重衣」を演奏した。山室千代子は唄物を得意とする山田流の箏曲家としてだけではなく、藤植流胡弓の家元としても活躍していた。特に三世荒木古童とは、今井慶松らと移風会を興した同志でもあり、東京の三曲界でもこのほか親交が深かった。この会には近江賀童はか竹友会の会員二十名程が出演し、北海道に荒木派が立派に根づいたことを世に示す結果となった。

この演奏会の成功は、その後の長谷川羊

童の尺八人生に大きな影響を及ぼすこととなった。その一つは道南地方の邦楽愛好家達に大きな反響を呼び、長谷川羊童の三曲界での地位を確固たるものにしたことである。これによって糸方を含めた道南の三曲界で、長谷川羊童は指導的立場を得るに至った。もう一つは荒木古童の評価である。東京から遠く離れた地方にあって、一丸となって活躍する多くの孫弟子たちの熱演ぶりを目の当たりにした荒木古童は、長谷川羊童の指導力と統率力に感銘するとともに、その力量を高く評価した。これが契機となって、毎年東京で開催されていた童窓会の定期演奏会への出演が許されたのであり、長谷川羊童の東京でのデビューの登壇となった。

大正十一年夏の三世荒木古童を招聘しての特別演奏会は、以上のように大きな成果を残すとともに、貴重な古童来道の記録となった。

## 童窓会の定期演奏会に出演

こうして函館での演奏会を契機として、荒木古童に童窓会の定期演奏会への出演を勧められた長谷川羊童は、翌大正十二年の春季定演に出演することを決意した。そして、その後は東京で毎年春秋二回開催されていた童窓会の定期演奏会に積極的に出演した。

大正十二年三月三日、東京丸の内にある有楽座で開催された春季定演に出演した長谷川羊童は、関和童・納富寿童・清水知童・宮内岱童らと肩を並べて演奏した。単身上京して大きな舞台での演奏を無事終えた長谷川羊童は、三月五日美妙社を表敬訪問し、藤田社長に北海道の尺八界の模様を伝えるとともに、今後の抱負を披瀝した。

三世荒木古童を筆頭に、童窓会の幹部が出そろって定演に出演できたことは、長谷川羊童にとって大きな自信となった。また、

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

# 川村楽器店

札幌市中央区南3条西2丁目(HBC三条ビル) ☎(0)221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。

会派の幹部として全国的に活躍していた兄弟弟子達の演奏を聞いた長谷川羊童は、強い刺激を受けた。帰函後、長谷川羊童が活発な演奏活動を展開しはじめたのも、そうした体験の現れであろう。その手始めとして社中の充実強化を願ひ、大正十四年十月十四日、函館市末広町で竹友会の演奏会を開催した。

続く大正十二年十月の秋季定演は関東大震災のため開催されなかった。三世荒木古童の家は震災のとき、向島の火が川越しに飛び火して起こった近所の火災により類焼し、またたく間に全焼してしまった。古童は愛管を持って逃れ一命は取り留めたものの行くあてもなく、その夜は家族とともに近所の野原で一夜を明かしたという。翌日、白髪橋をわたって寺島村の吉田朋吉を尋ね、しばらくそこに身を寄せた。

大正十三年六月十五日、震災後初めて童窓会の春季定演が帝国ホテルの演芸場で開催されたが、この時長谷川羊童が出演したかどうかは分からない。記録として残っているのは、昭和二年春の第九回定演への出演である。大震災により東京における音楽活動が停止する間も、長谷川羊童は函館を中心に、門人の育成や温習会の開催などを行い、社中としての活動を盛んに続けていた。

昭和二年三月長谷川羊童は定演を二か月後に控え、糸方との下合わせのため上京した。五月一日明治神宮外苑の日本青年館で開催予定の第九回定演では、プログラムの最初で「楳枕」を演奏することになっていたからである。当時、童窓会幹部として定演に出演していたのは、後に四世荒木古童を継承した荒木梅旭を始め十七名にすぎなかった。いずれも東京、横浜でプロとして活躍している人物で、地方では浜松市の小池玲童（後に都山流に転門し玲山として活躍）と函館の長谷川羊童の二人だけだった。当日の会券は一等と二等とに区別され、一等は三円、二等は二円で当時としては高い値段で販売された。

続く定演は十月九日、東京教習屋橋にある朝日新聞社講堂で開催された。この時長谷川羊童は「若菜」を米川親敏の筆、福田喜久子の三絃で演奏した。

### 古童二度目の訪函

童窓会の幹部として、吹奏の面でも居並ぶプロと対等に活躍するようになった長谷川羊童は、宗家荒木古童を招聘して、二度目の特別演奏会を企画した。

昭和三年八月四日、竹友会主催の特別演奏会は、函館市公会堂で開催された。六年ぶりに二度目の訪函となった荒木古童は、社中の堅実な発展ぶりに驚くとともに、一層羊童に対する信頼を厚くした。当時、荒木派の勢力が東京周辺に限られていただけに、門人達の間には詳細に至るまで常に自分の目で確かめることが出来てはいたが、東京から遠く離れた北海道で活躍していた長谷川羊童社中のことについては、年一、二回童窓会の定演に出演する羊童を通じて知る程度にすぎなかったから、驚きようも大きかったであろう。

なぜかこの年、宗家を招聘しての大演奏会を終えた翌月の九月十六日、函館五稜郭事務所で竹友会主催の演奏会が開催されている。糸方に亀谷佐喜松などの賛助出演を得ての会であり、単なる合奏会とは思われない。推論の域を出ないが、荒木古童を招聘しての演奏会開催に伴い、羊童自身の昇格、又は門人の昇格があり、それを祝う会ではなかったか。

その後も長谷川羊童は、東京で開催された童窓会の定期演奏会に毎年のように出演を続けた。

昭和六年十月三日午後六時から丸の内帝国ホテルで行われた第十八回定演では、一部のトリを努めた三世荒木古童の「玉かつら」のあと休憩を挟んで、百瀬芳童・木村士童の連管による「鹿の遠音」で二部が始まった。宮内岱童の「八重衣」に続いて、長谷川羊童は「末の契」を、箏川内茂登子、三絃福田喜久子で演奏した。その後、納富

寿童の「残月」、荒木梅旭の「葵の上」でこの会の幕が下りた。

### 社中の強化

三世荒木古童を招聘しての演奏会には、社中強化の狙いがあつたに違いない。毎年上京して東京の邦楽界に通じるとともに、童窓会の幹部達と対等に舞台を踏めるようになった長谷川羊童は、大きな希望を抱いたであろう。それは支部と社中という二つの組織を活用する考えによるものだったに違いない。まず最初の目標は自分自身が東京で通用する尺八家になることだった。そしてそれが実現しつつある今、次にしなければならぬことは、社中の充実にあった。東京周辺には宗家を軸とした荒木派の地盤はあつても、直門が大半を占め、少数精鋭としての感が強かった。地方にあつて長谷川羊童は、門人の育成に力を入れ、社中の勢力を伸ばすことで荒木派への貢献を目指したのである。

昭和六年十二月、瀧野歩童と佐々木正童の二人は、長谷川羊童の推薦を受け、童号を允許されている。また、翌七年十二月には新栄昌童が童号を許されるなど、その後は毎年のように社中に童号を持つ者が増え、社中幹部として組織強化に大きな力となった。

社中の基盤作りが順調に進む中で、長谷川羊童は地元糸方に目を向けた。才能を持ちながら函館にいて機会に恵まれない糸方に心を砕いた。昭和八年五月、長谷川羊童は童窓会定演の助演者として、地元糸川の川内佐登治を同行し上京した。それまでは米川親敏・宮崎春昇・福田喜久子など東京で活躍する糸方に助演を依頼していた。従来の慣例を止め、川内佐登治を同行したというからには、それなりの力を認めたからであり、それまでは糸方の引き立てにより演奏していた羊童が、逆に羊童の力量で糸方を引き立てられる段階に至ったことを示している。

このことが契機となり、川内佐登治は昭

かつら 床山

坂 板

板坂又二郎

■店 〒130 東京都墨田区横川2丁目11番5号(齊藤ビル1階) ☎(03)3621-0166

■自宅 〒110 東京都台東区根岸2丁目21番17-601号 ☎(03)3875-6183

和十年三月羊童の願いどおり上京して渋谷区の金王町で教授を開始することとなった。

### 函館大火で被災

川内佐登治の上京は、単に大志を抱いてのものではなく、函館大火により町のほとんどが焼失したことによる。昭和九年春、函館で起こった火災は、折からの風に煽られて、市街地のほとんどを焼き尽くした。多くの犠牲者を出した函館大火は、悲報として全国に知らされた。恵比須町に住んでいた長谷川羊童も類焼で被災者の一人となった。被害を免れた末広町の巴川方に身を寄せた長谷川羊童は、すぐに立ち直って再建の道を切り開いた。

悲報を知った国風音楽奨励会の遠藤操琴は、昭和九年四月四日、北見劇場で函館火災義捐演奏会を開催し、その益金百二十三円を寄付している。

昭和九年五月、もとの恵比須町に住宅兼店舗を新築した羊童は、尺八教授を開始するとともに、十月の童窓会秋季定演に出演するため上京した。

昭和十年三月、芸仲間として親交深かった川内佐登治の上京に同行した羊童は、彼女の東京での教授開始を支援するため、知友の糸方を回った。

### 荒木派の分裂

昭和十年五月二日午後八時三十分、三世荒木古童は還暦を待たずしてこの世を去った。川内佐登治を世話して東京から戻ったばかりの長谷川羊童だったが、訃報を知って急遽上京し、葬儀に参列した。恒例により春季大会として、五月十八日帝国ホテル演芸場で予定されていた第二十五回定演は、宗家の他界により無期延期となった。

三世荒木古童の死は、荒木派の分裂という重大な事件を引き起こす要因となった。三世荒木古童の後継として、四男の梅旭が四世を継承したことを発端とし、荒木派は二つに分裂することになった。この分裂騒ぎは新聞報道でも大きく取り上げられ、三

曲界にとどまらず広く国民の知るところとなった。

一周忌を終えた昭和十一年十一月十三日、東京麹町の軍人会館で、故三世荒木古童追善と銘打った第二十五回の童窓会定演が一年半遅れて開催された。追善演奏会とあつて、この会には来賓として琴子古流では兄弟弟子だった川瀬順輔と川瀬悌二が特別出演し、二部の最初に本曲「真虚鈴」を演奏して、会に華を添えた。また、都山流東京幹部会の倉川簾山と吉田礒山は、都山流本曲「夕月」を追悼演奏し、三世古童の尺八界における交友関係の広さを示した。

この時、北海道から唯一人参加した長谷川羊童は、十一月十日函館を出発した。会では他の会員とともに追善曲として本曲「虚空鈴慕」を演奏したほか、箏高橋栄清・三絃高橋松子で「須磨の嵐」を演奏し、残務整理を手伝って十一月二十三日に帰函している。

会の分裂騒ぎの最中ということもあり、三世古童の死後、最初に行われたこの会には四世荒木古童を継承した梅旭は出演しなかった。そのこともあって、主催は故三世荒木古童門下童窓会とし、直門だった有志が集まって会を開いた形式を取った。糸方には生前親交の深かった富崎春昇や今井慶松・中能島欣一・加藤柔子・富山清琴など

邦楽界の重鎮が名を連ねて、名流大会のような豪華な顔触れとなった。

### 荒木派の大同団結

三世荒木古童の死後四年を経過した昭和十四年夏、吉田耕童・関和童・百瀬芳童など七名の理事が中心になり、荒木派の大同団結を目指し行動を開始した。具体的には荒木派の中核として宗家総務部を設置し、宗家事務の一本化を図り、組織運営体制を確立しようとするものだった。こうした理事の提案を支持すべく、全国の童窓会有志が賛同宣言を発表したが、名を連ねた二十四名の一人として、函館の長谷川羊童も連署している。

時間の経過とともに会派の統合も可能となった昭和十七年、四世荒木古童の体調を心配していた長老格の山本友三郎らの尽力によって、統合の第一歩として合同演奏会が企画された。こうした動きの中、四世荒木古童は、昭和十八年に入って更に体調を崩していった。せめて定演には出演したいとの希望を持っていたのであろう、春季大会を延期してまで静養に励んでいたが、惜しくもその夏、七月一日午前〇時、自宅で急性肺炎のため四十二歳の人生にピリオドを打った。古童を継承してわずか八年の歳月だった。

### 長谷川羊童が出演した童窓会定期演奏会（三世古童存命中）

年月日	回数	会場	曲目	助演者
大正12年3月3日	不明	不明	不明	不明
昭和2年5月1日	9回	日本青年館	楫枕	不明
昭和2年10月9日	10回	朝日新聞社	若菜	不明
昭和3年10月21日	12回	日本青年館	かざしの雪	箏米川親敏、三絃福田喜久子
昭和4年5月18日	13回	朝日新聞社	里の春	箏河田登子、三絃福田喜久子
昭和6年5月2日	17回	帝国ホテル	新娘道成寺	三絃木谷寿恵子・福田喜久子
昭和6年10月3日	18回	帝国ホテル	末の契	箏川内茂登子、三絃福田喜久子
昭和7年10月15日	20回	帝国ホテル	真虚鈴	



日本舞踊のお写真なら (ポーズ、舞台)

# 藤本写真館

(各地出張撮影も致します)

〈スタジオ〉 札幌市豊平区平岸4条4丁目 4-10 TEL821-3515 ●駐車場あります。